

小林秀雄著『本居宣長』：三十一章主題《宣長の『見る・知る(事の世界)』語る[言(こと)の世界]』一體觀と、光圀/澹泊『大日本史』・白石『古史通』等[事の世界『實(事實)』に據つて事を記す』偏重』との懸隔：その「關係論」的纏め。

①『見る・知る(事の世界)』『語る(言(こと)の世界)』(物:場 C')②『朴陋(ぼくろう:素朴でいやしい)の俗』(物:場 C')③古人(物:場 C')⇒からの關係:①といふ私達の働きは、特に意識して離さうとしない限り、一體をなしてゐる。このやうに考へる⑥と、②を批判し、「④:觀察して③(實)を知らう(客觀・實證的)とした⑦とは、事ごとに話が食違ふ(D1の至小化)事になる」⇒「⑤:歴史の形で書かれた神の物語」(④的對立概念F)⇒E:特に兩者の場合、扱はれた古記が、⑤であつたが爲に、二人の歩いた道に、大變際立つた(Eの至小化)對照が現れるといふ事になつた」(白石:⑤への距離不獲得:Eの至小化)⇒⑥宣長:⑦白石(△杵):①への適應異常。

①神代(物:場 C')⇒からの關係:①の記載をそのまま「②:受取つてはならぬといふのが④の考へである」(D1の至小化)⇒「③『詞』」(②的概念F)⇒E:宣長では、決して離れる事のなかつた③[言(こと)の世界]と『意』(事の世界)とが、離れる(Eの至小化)のである」(③への距離不獲得:Eの至小化)⇒④白石(△杵):①への適應異常。

①『大日本史』(物:場 C')②近世の史學(物:場 C')③研究方法(物:場 C')⇒からの關係:①は、②の上で、最大の努力(D1の至大化)が拂はれ、最高の成績(D1の至大化)があげられた仕事だが、「④:編纂者、光圀以下の⑥の意識的な努力は、③の上で、出来るだけ客觀的、實證的にならうとしたところがあつた[『通鑑綱目』を典範とする朱子學史觀の強い影響下]」(D1の至大化)⇒「⑤:白石と澹泊(『大日本史』編纂者)」(④的概念F)⇒E:⑤との場合にしてもその點(客觀的、實證的)を見損なつてはなるまい」(⑤への距離不獲得:Eの至小化)⇒⑥史家達(△杵):①への適應正常。

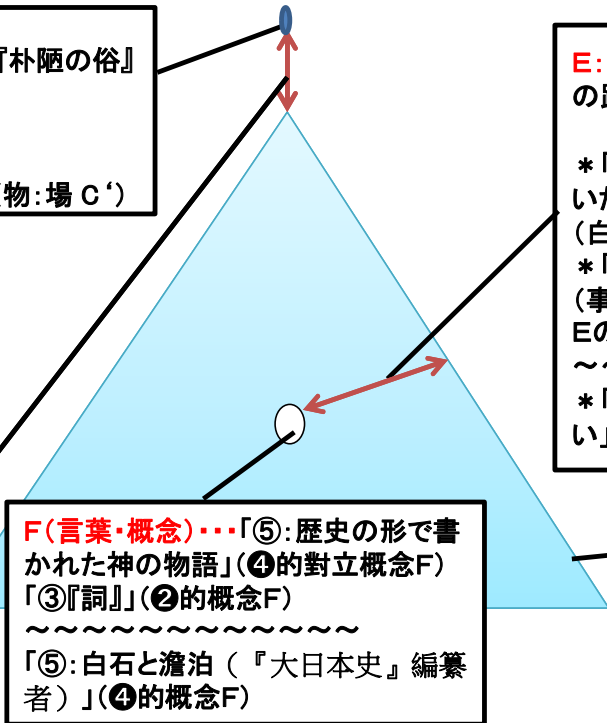
(物:場 C')...
①『見る・知る(事の世界)』『語る(言(こと)の世界)』(物:場 C')②『朴陋の俗』(物:場 C')③古人(物:場 C')。
①神代(物:場 C')。
~~~~~  
①『大日本史』(物:場 C')②近世の史學(物:場 C')③研究方法(物:場 C')

からの關係(D1の至大化)

\* ①といふ私達の働きは、特に意識して離さうとしない限り、一體をなしてゐる。このやうに考へる⑥と、②を批判し、「④:觀察して③(實)を知らう(客觀・實證的)とした⑦とは、事ごとに話が食違ふ(D1の至小化)事になる」。

\* 「①の記載をそのまま「②:受取つてはならぬといふのが④の考へである」(D1の至小化)」。

\* ①は、②の上で、最大の努力(D1の至大化)が拂はれ、最高の成績(D1の至大化)があげられた仕事だが、「④:編纂者、光圀以下の⑥の意識的な努力は、③の上で、出来るだけ客觀的、實證的にならうとしたところがあつた[『通鑑綱目』を典範とする朱子學史觀の強い影響下]」(D1の至大化)。



E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]...「So called」Fと(△杵)との距離獲得」(Eの至大化)。

\* 「特に兩者の場合、扱はれた古記が、⑤であつたが爲に、二人の歩いた道に、大變際立つた(Eの至小化)對照が現れるといふ事になつた」(白石:⑤への距離不獲得:Eの至小化)。

\* 「宣長では、決して離れる事のなかつた③[言(こと)の世界]と『意』(事の世界)とが、離れる(Eの至小化)のである」(③への距離不獲得:Eの至小化)。

~~~~~

* 「⑤との場合にしてもその點(客觀的、實證的)を見損なつてはなるまい」(⑤への距離不獲得:Eの至小化)。

F(言葉・概念)...「⑤:歴史の形で書かれた神の物語」(④的對立概念F)
「③『詞』」(②的概念F)
~~~~~  
「⑤:白石と澹泊(『大日本史』編纂者)」(④的概念F)

(△杵)⑥宣長:⑦白石/④白石/⑥史家達